

頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム  
—世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化—  
報告書

生業活動と社会生活を通してみた東南アジア農村の変容と将来像  
—カンボジアとその周辺国における研究—

派遣者：小林 知

派遣期間：2015年12月20日～2016年2月19日

派遣先：王立プノンペン大学開発学科（カンボジア王国）

キーワード：安寧社会，農村の変容，カンボジア，国家と社会，公共の意識

### 1. 研究課題について（400字程度）

東南アジアに暮らす人々の生活の今後の変化を、安寧社会というキーワードで考えてゆく。その際、特に、農村に生まれた人々の暮らしを検討する。人々の暮らしは、生命を維持する糧を得るための手段としての生業と、家族や親族とのつながりを中心とした社会生活から成っている。農村の生業は、伝統的には、狩猟・採集・漁労や耕作など、居住地の周辺自然环境への働きかけを中心とし、世帯は季節変動などに即して複数の活動を行った。しかし、今日の農業は、外部から流入した技術や情報に影響を受け、刻一刻と変化している。また、都市化とグローバル化を背景として、今日の農村の人々の生業活動は農外活動に大きく依存するようになった。特に、都市へ、隣国へ、東南アジアの外へと、猛烈な勢いで範囲を広げる出稼ぎは、生業の一手段であるだけでなく、農村の人々の社会生活の変化にも大きな影響を与えている。過疎という日本の農村の深刻な問題も念頭に、21世紀の東南アジア農村社会の将来像を検討することが、本研究の課題である。

### 2. 派遣の内容（400字程度）

平成27年度第2回目の派遣として、2015年12月20日から2ヶ月間カンボジアで過ごした。年末から例年よりもかなり涼しい気候が続いたためか、年末年始は体調を崩してしまった。そのために一週間ほど伏せたが、回復した後は順調に活動することができた。

2016年1月の前半は、昨年2月と11月に訪問したカンボジア＝タイ国境地域の調査地の農村開発の状況についてデータを検討した。そしてその成果を、2016年1月16日に王立農業大学で行われたThe 7th International Conference on Environmental and Rural Developmentにて、“Environmental Rehabilitation, Connectivity and Globalization: A Study of Rural Development of a Community in Cambodia-Thai Borderland”というタイトルで発表した。

1月末はまた、1990年代末に滞在したコンポントム州の農村と、世界遺産として知られるアンコールワット遺跡を擁するシエムリアップ州を訪問した。前者では最近の農業開発、後者では近年の観光開発の様子を観察した。さらに、2月6日から11日までは、王立プノンペン大学開発学科の教員2名および学部生2名と、王立農業大学大学院修士課程の院生4名を伴って、ポーサット州の稲作村落で予備的なフィールドワークを行った。

### 3. 派遣中の印象に残った経験や体験（800字程度）

1月中旬に参加した国際会議は、The International Society of Environment and Rural Development という学

会が運営するものであった。カンボジア人の他、タイ人、フィリピン人の研究者が多く参加しており、意見交換することができた。発表で取り上げた調査地は、タイとの国境まで数キロしか離れておらず、1980年代から1990年代にかけて政府軍とポル・ポト軍のあいだの激しい戦闘の場であった。しかし近年は、換金作物の栽培が広く広がっている。さらに、タイのインフラへのアクセスの良さを支えとして、ペーパークラフトを生産する日本企業の工場が2010年前後に建てられた。発表では、その変容の駆動力を、2000年代半ばに地雷除去のために現地に入った日本人専門家を中心に広がったコネクティビティの作用として分析し、その特徴を東南アジアの農村開発の一つのかたちとして提示した。

2月に入ってから実施した農村でのフィールドワークは、ポーサット州バカーン郡の3つの村を対象とした。ランダムサンプリングで各村から20家族を選び、家族構成、家計、生業活動について質問票を用いた調査を行った。補足的に実施した3村の村長へのインタビューを含めて、生業と社会生活の変化の様子を具体的に探るヒントを得た。生業の変化については、農業技術の変化だけでなく、マイクロファイナンスの浸透による家計の変容も興味深いテーマである。また出稼ぎが多くの村で増加傾向を続けており、それに伴う家族関係の変化や、老人や子供へのケアの問題を考える必要性を強く感じた。

村長へのインタビューでは、サンガハと呼ばれる仏教行事について質問した。サンガハは、重い病気にかかった家人を抱えた村人に、村内でドネーションを募って集められた現金を贈る行為である。コミュニティのレベルでの制度化されていない助け合い行為という点で、従来は農村経済の研究者がリスクシェアリングの文化の一例として研究報告をしてきた。ただ、その行為は、仏教の観念に直接的に根ざしており、多くの事例では、仏教的知識を豊富にもち、村人から尊敬されている宗教的リーダーが主導的な役割を果たす。今回、村長らとのインタビューを通して、ポーサット州バカーン郡の村々でそのサンガハがごく近年に始まり、現在徐々に広がっている様子を確認することができた。そのなかで個人的に興味深く感じたのは、地域のサンガハの普及を後押ししていたのが、宗教的リーダーというよりも、州政府の行政責任者であった点である。つまり、そこでは、ローカルな文化的な資源を利用しようという上からの介入が、コミュニティの活動を生みだし、その紐帯を実体化する動きが兆しとして伺われた。「安寧社会」としてのカンボジア社会のポテンシャルを考える上で、サンガハをめぐる地域の動向は非常に興味深い事例であり、今後も調査を継続しようと考えている。

#### 4. 目的の達成度や反省点 (400字程度)

2月の農村でのフィールドワークは、それを通してカウンターパートとの共同研究を具体化することも大きな目的だった。王立プノンペン大学開発学科の教員2名には、事前に、フィールドワークを通して今後自身が追求する調査テーマを決めるよう伝えていた。フィールドワーク後の話し合いでは、マクロ経済を専門とする教員は、ポーサット州を調査地として村レベルでの生業活動の経済的ポテンシャルを研究する関心を示した。心理学のバックグラウンドをもつもうひとりの教員は、今日の農村家族のなかの人間関係について調査することを希望した。教員の他、王立農業大学の修士課程の院生に対しても、質問票の扱い方などを教えるとともに、修士論文のテーマに関してアドバイスをした。このようなかたちでカンボジア人のカウンターパートの研究を支援することができた点は、今回の派遣の成果である。一方で、農村での調査活動にもっと多くの日数を割くべきだったと反省がある。

#### 5. 今後の派遣における課題と目標 (400字程度)

平成28年度は、最後の派遣として3ヶ月程度再びカンボジアに渡航する予定である。ネットワークの強化とともに、農村での調査により多くの時間と労力を注ぎたい。そしてその上で、カンボジア社会を例として「安寧社会」の未来像を検討することが最終的な課題である。